



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	石川明人著「ティリッヒの宗教芸術論」(北海道大学出版会、2007年) 205+21頁
Author(s)	安酸, 敏眞; Yasukata, T
Citation	基督教學, 43, 33-38
Issue Date	2008-09-08
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/46720">https://hdl.handle.net/2115/46720</a>
Type	other
File Information	43_33-38.pdf



## 石川明人『テイリツヒの宗教芸術論』

(北海道大学出版会、二〇〇七年)二〇五十二頁

安酸 敏 眞

パウル・テイリツヒが逝つてから今年で早四三年、わが国ではおもに京都大学の芦名定道氏を中心に、彼の神学的・宗教哲学的思想について多角的な検証が精力的になされ、その研究成果を収録した『テイリツヒ研究』もすでに十一号を数えている。こういう状況下において、これまでのわが国のテイリツヒ研究とは少し趣を異にする良質の研究書が出版された。それが北海道大学助教石川明人氏の『テイリツヒの宗教芸術論』（北海道大学出版会、二〇〇七年）である。本書は、二〇〇四年に北海道大学大学院文学研究科へ提出された学位申請論文、「テイリツヒの宗教思想における芸術の問題」に加筆修正を施したものであるというが、コンパクトな体裁にもかかわらず、なかなか重厚な議論が展開されている。

テイリツヒにおける芸術の問題に関しては、Michael F. Palmer, *Paul Tillich's Philosophy of Art* (Berlin: Walter de Gruyter, 1983) (邦訳：マイケル・F・パーマー著、野呂芳男・指谷朋子訳『パウル・テイリツヒと芸術』（日本基督教団出版局、一九九〇年）)によって本格的検討に先鞭がつけられたが、その数年後にJ・ディレンバーガーが編集刊行した *On Art and Architecture, edited and with an Introduction by John Dillenberger, in collaboration with Jane Dillenberger* (New York: Crossroad Publishing Company, 1987) (邦訳：P・テイリツヒ著、前川道郎訳『芸術と建築について』（教文館、一九九七年) ) によって、いまやわれわれは基本的テクストをほぼ手中に収めている。今後さらに未出版の草稿などが出てくる可能性もなくはないが、テイリツヒの芸術論を論ずるための重要資料は、ほぼ出揃ったと考えてもよからう。今回満を持して上梓された石川氏の研究は、この主題に関する今後の研究を規定するものになることが予想されるので、少し詳しく論評してみたい。

全体は、序論と七つの独立した章と終章から成り立つ

ており、巻末には「テイリツヒが言及している芸術家一覽」が添付されている。序章では、テイリツヒと芸術との関わりが簡単に述べられた後、テイリツヒ研究史における芸術論の位置づけと先行研究について略述され、その上で本書の主眼が直截に表明されている。著者によれば、「本書の基本的な狙いは、テイリツヒの宗教思想における芸術に関する議論の全体を詳しく整理し、彼の宗教思想を念頭に芸術論における主張を分析し、また芸術論の内容から宗教思想を再考することにある」(一〇頁)という。著者の見るところでは、テイリツヒの思想的営みにおいて芸術論は、単に宗教論の応用編として片づけられるのではなく、宗教論と芸術論との間には本質的な、いわば相互補完的な密接な連関がある。この両者の興味深い関係を解明するために、著者はテイリツヒの宗教思想に関する該博な知識と、みずから持ち合わせている鋭敏な芸術的センスに基づいて、「テイリツヒの宗教思想における芸術の問題」を独自の切り口で解析してみせる。

第一章「テイリツヒと宗教芸術論」は、テイリツヒの

宗教芸術論をおおまかに概観した部分で、ここでは芸術に対するテイリツヒの関心がその生涯から跡づけられ、とくに一九世紀末から二〇世紀初頭のヨーロッパで勃興した「表現主義」(Expressionism)と称される芸術運動の時代背景とその特質、表現主義絵画に対するテイリツヒの共感、その芸術思潮擁護に含まれる宗教的含意などが、小気味よいタッチで叙述される。第二章「宗教芸術論の中心問題と具体的な作品の評価」は、本書のなかで一番分量のある章であるが、ここではまず「テイリツヒにおける視覚の神学」について語られ、テイリツヒにおいて「見る」という行為が特別に重要な神学的意義を有していたことが示される。そしていかなる芸術が「宗教的」といえるのか、宗教芸術にはどのような類型がみられるのか、テイリツヒの見解に即して明らかにされ、そこからさらに宗教芸術と「表現」の意味、そして表現主義における「宗教性」といった問題が、美学者・美術史家のW・ヴォリンガーの見解も参照しながら、しっかりとテクスト分析を通して論述される。入念な解釈学的手続きによって確認されるのは、(1)テイリツヒが芸

術を見るときに最も重視するのは、作品の精神的実質性、すなわち「リアリティの深みの次元」という「内実」(Gehalt)が、「形式」(Form)と「内容」(Inhalt)を通して、いかに豊かに「表現」されているかどうかということ(四二―四三頁)、(2)「テイリツヒにおいて芸術は、宗教的題材であれ世俗的題材であれ、『究極的な意味と存在の経験が表現されている限り、宗教的』なのである」(四五頁)ということ、(3)テイリツヒが最も注目する宗教芸術の類型は、「内実が支配的な様式」のうちの客観性の様式、あるいは別の類型論によれば、「宗教的様式―非宗教的内容」の類型に区分されるところの、表現主義の芸術であること(四九頁)、などである。

第三章「宗教思想の枠組みと芸術論の根拠」では、著者はテイリツヒには「意味の形而上学」と「存在論的人間学」という二種類の体系構想があることを指摘し――著者は声名氏の解釈をそのまま受容して、第一の枠組みを「モデルⅠ」、第二の枠組みを「モデルⅡ」と呼んでいる――、この二つの異なった枠組みにおいて、芸術がそれぞれのよう理解されているかを明らかにする。

モデルⅠにおける芸術理解としては、「世俗的な形式で聖なるものの内実で満たし、聖なるものの内実を世俗的形式で表現することによって、「宗教と文化の神律的統一」を実現しているものとして、テイリツヒは表現主義芸術を最も高く評価していることが示される(八二頁)。これに対してモデルⅡにおける芸術理解では、宗教的な芸術の創造は、「自らのおかれている実存的窮境を正面から見つめ(宗教的問い、実存主義的状况認識)、またそれを創造的に表現するという行為によって再びその窮境を自己のうちに引き受ける(存在への勇氣)営み」(九〇頁)として解釈され、空虚と無意味性の時代に敢然と立ち向かう表現主義の芸術が推奨される。両方のモデルから言えることは、テイリツヒにとって芸術作品の価値は、それが「どれだけ『宗教的次元』を表現しているのか、またいかなる『究極的リアリティ』を表しているのか」(九三頁)、ということだという。

第四章「キリスト論と表現主義」は、テイリツヒのかかる宗教芸術論の神学的射程を例示するために、イエス・キリストを「新しい存在」(New Being)の顕現と

して捉える彼のキリスト論にスポットを当て、とくにア  
ナロギア・イマギニス（像の類比）という概念に着目  
して、テイリツヒにおけるキリスト論と表現主義の本  
質的連関が論証される。第五章「芸術表現と「愛」の概  
念」は、芸術的表現を〈愛〉という見地から考察し、ギ  
リシア語のアガペー、エロース、フィリアなどを媒介と  
しながら、テイリツヒが芸術的表現を愛によつて支え  
られた営みとして理解していたことが示される。第六  
章「聖なる空虚」としての教会建築」は、それまでの  
絵画を中心とした芸術論議から一転して、テイリツヒの  
建築論が議論の俎上に載せられる。著者によれば、「建  
築は芸術的な創造物であると同時に技術的な創造物でも  
ある、というのがテイリツヒの建築理解の第一の要点で  
ある」（一三九頁）が、テイリツヒの建築論においては、  
「誠実の原理」（principle of honesty）と「聖化の原理」  
（principle of consecration）が主要原理と見なされ、この  
二つの原理の統一は、現代のプロテスタント建築にお  
いては「聖なる空虚」（sacred emptiness）という形で表  
現されるという（一四四頁）。第七章「宗教芸術批判と

キツチュの美学」は、テイリツヒが「非宗教的」として  
批判し攻撃した芸術作品の側から、彼の宗教芸術論の問  
題性をいわば逆光をもつて照射しようとしたもので、こ  
の作業のために著者はここで「キツチュ」（Kitsch）と  
いう概念を手がかりにして、テイリツヒの宗教芸術論の  
特質を再確認すると同時に、その限界をも指摘する。終  
章は「あとがき」に近いものであるが、「まだ論じ足り  
ない部分やあらためて取り上げるべき事柄」（一七五頁）  
があるとしつつも、これまでの考察からテイリツヒの宗  
教芸術論の特質を総括し、かつそこに潜む問題性をも示  
唆してみせる。

以上が本書の概要であるが、石川氏がみずみずしい感  
性をもつて上梓したこの書物は、評者のようにテイリツ  
ヒの思想を、もっぱらその神学的・宗教哲学的側面から  
学んできた者にとっては、彼の思想の奥行きの深さとそ  
の現代的意義を再認識させるに十分なインパクトをもつ  
た研究書である。評者も、田辺明子氏の先駆的論文や  
川桐信彦氏の一連の論文によつて、本書で扱われた主  
題について一定の先理解はもっていたが、今回本書を

熟読することを通して、あらためてティリッヒに興味を覚えた。それは表現主義芸術とそれに共鳴するティリッヒの宗教思想が、二〇世紀欧米の精神的状況を如実に反映していると、再度痛感させられたからにはかない。『近現代ヨーロッパの思想』の著者フランクリン・L・パウマーは、ジェームス・エンソルの『死と向かいあう仮面』やムンクの『叫び』などを引き合いに出して、表現主義の芸術家たちによって非合理的な人間の暗黒面が視覚化されたと述べているが、アバン・ギャルドな表現主義者たちが芸術的表現へともたらしたものは、まさに「円錐の」先端を切り取られたヨーロッパ」(a truncated Europe)の「実存的窮境」以外の何物でもない。かくして明け初めた「不安の時代」(Age of Anxiety)において、ティリッヒは「究極的リアリティ」や「深みの次元」を問い続けたが、彼の神学的・宗教哲学的思想そのものも、彼が偏愛を傾けた表現主義の芸術作品と同様、「実存的な『窮境の鏡』(mirrors of our predicament)」(九〇頁)という側面をもっている。

そこであらためて問い質さなければならぬのは、

二一世紀の現代においてわれわれはティリッヒの思想からどのような積極的メッセージを聴きとれるか、ということである。文化の営みに内在する実存的・哲学的な「問い」と、キリスト教使信の宗教的象徴に含まれる超越的な「答え」とを、一対の合わせ鏡のようにして切り結ぶティリッヒの「相關の方法」は、彼をしてその時代の精神状況と正面から取り組む、当代随一の弁証神学者に仕立て上げた。かかる方法を駆使するティリッヒの神学は、二〇世紀の人々の実存的窮境に胚胎する、同時代の宗教的な「問い」を鋭敏に掬い上げた。しかし彼がその時代に与えた神学的な「答え」は、はたして現代の(すなわち二一世紀の)われわれにもそのまま通用するであろうか。前世紀の七〇年代以降、「ヘケリュグマ神学」といい(弁証神学)といい、およそ神学そのものの存在基盤が揺らぎだし、神学——宗教ならびに宗教学はその限りではない——はかつての威信をすっかり失ってしまった。それだけでなく、現代芸術の動向もそれ以降すっかり変貌して、かつてティリッヒが「預言者的機能」をそれに付与した表現主義も、いまや「表現性」

(expressiveness) の概念そのものさえ前提しえない芸術作品(？)の登場によって、すっかりその魔力を半減させている。

だが、こういう状況だからこそ、ティリツヒの宗教芸術論を真摯に問い質す作業のもつ意味は大きい。表現主義という時代の思潮に色濃く刻印されたティリツヒの宗教芸術論は、すでにその事実それ自体によって、一定の限界性を有していることは否定できないが、世俗的文化のただなかで超越の声を傾け、人間と世界の存在の深みに潜む意味を剔抉すべく努力したティリツヒは、異なったコンテクストを生きるわれわれにとつても、参照すべき範例としての価値と魅力を失ってはいない。二〇世紀神学を主導したティリツヒは、本書の見事な解析作業を通して、再び新たな姿でわれわれの前に立ち現れた。まさに「老兵は死なず！」である。本書の宗教芸術論を踏まえて、ティリツヒの宗教思想全体をより深く解析することは、今後なされなければならない課題であろう。いずれにせよ、このような力作を上梓された著者に、この場を借りて心から感謝を申し上げたい。

追記 なお、気がついた範囲で誤植を指摘しておく  
と、一三頁一七行目の「新即物主義」なるドイツ語は、  
Neuesachlichkeitではなく Neue Sachlichkeitであろうし  
(MW 4, 193 参照)、八三頁一行目の「質量」は「質料」  
とすべきであろう。